

後膝におけるボーンシスト(骨嚢胞)について

日高軽種馬農協門別診療所 柴田 良

本年度より、レポジトリーにおいて、任意で後膝のレントゲン写真の提出が可能となりました。後膝のレントゲン写真が提出できるようになり、後膝のボーンシストについて質問されることが多くあります。そこで今回は後膝のボーンシストについて簡単にお話しさせていただきます。

(病因)ボーンシストは1～2歳の若齢馬に好発する疾患で、通常は遺伝、栄養、急速な成長などによる成長期特有の整形外科疾患(DOD)の1つと考えられています。その他外傷により起こるという説もあります。後膝におけるボーンシストは、ほとんどが大腿骨内側顆に形成されますが、まれに大腿骨外側顆や脛骨近位に形成されることもあります。

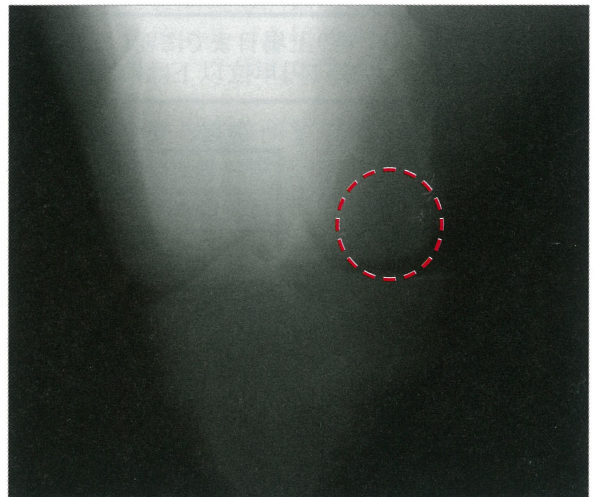
(症状)後膝におけるボーンシストは、軽度～中程度の跛行もしくはトレーニングを開始すると跛行を示す例が多いとされています。跛行は休養により一度良化しても、運動再開により再び跛行を示すような回帰性の症状を示すことが一般的です。関節液の増加が見られることもあります。しかし、跛行や関節の腫れなどの臨床症状を示さず、レポジトリー検査により偶発的にボーンシストが見つかるケースも見受けられます。

(診断)ボーンシストの多くが、レントゲン検査によりシスト病変が確認されることにより診断でき、特に尾頭側像や屈曲外内側像でシストが描出されます。(写真1,2)。特に、臨床症状を示していない1歳馬のボーンシストにおいては、時間の経過とともにシストが消失する場合もあれば、シストが拡大し跛行を示すようになる場合もあるため、シストの状態をレントゲンにより追跡、検査することが重要です。

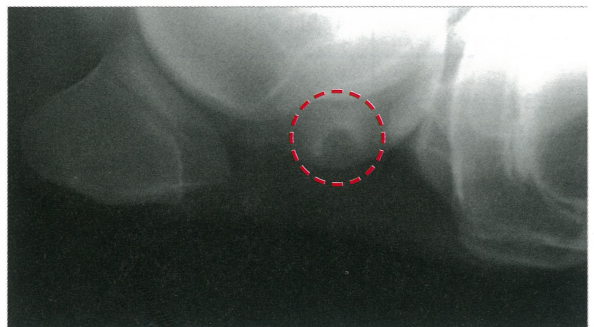
(治療)軽度なものであれば保存療法で治癒する可能性もあるとされていますが、重度なものや、保存療法で治癒しない場合にはさらなる処置が必要になります。処置には、病巣の搔爬術、病巣へのステロイド投与、骨移植、シストへのスクリューの挿入などがあります。しかしこれらの処置をしても症状が改善しないケースもあります。

(予後)過去の報告によると、大腿骨内側顆のボーンシストの馬における手術後の復帰率は56～77%とさ

れています。150頭の大腿骨内側顆のボーンシストで跛行を呈したサラブレッドに搔爬術を実施した報告によると、ボーンシストの関節表面の損傷が15mm以下のものでは術後の出走率が70%であったのに対し、15mm以上のものでは出走率が30%であり、ボーンシストの予後判定には、損傷した関節表面の大きさが良い指標になるとされています。また、症状を示していない1歳馬においても、大腿骨内側顆のボーンシストの直径が15mm以上のものでは高率で後に跛行を示し、予後もあまり良くないのではないかという報告があります。しかし症状を示していない1歳馬における後膝のボーンシストについての予後判定の基準はまだ明確にはなっていません。今後、レポジトリーでボーンシストの見られた馬を追跡調査することにより、競走馬としての予後判定の基準を明確にすることが必要であると考えられます。



(写真1) 尾頭側像による大腿骨内側顆のボーンシスト。円形透亮像のシスト病変が見られる。



(写真2) 屈曲外内側像による大腿骨内側顆のボーンシスト。